



針灸臨床家必読の書

病気の原因は種々あるが、治療の目的はただ1つ。
それは「通」である。

中国を代表する針灸家の一人、賀普仁氏がまとめ上げた三通法を学ぶための決定版。

「通」を基本に据えた賀氏の3つの通法をあますところなく紹介。三通法とは、微通・温通・強通の3つの針法のこと。

▶微通法とは、毫針による刺針法 ▶温通法とは、火針および灸を用いた針灸の方法 ▶強通法とは、三棱針による刺針を主とする刺絡法

三通法は、『内經』の通調理論にもとづき、さらに歴代の医家の経験を吸収して、

著者の臨床経験によって総括した、極めて実践的な針灸。

賀普仁=著/名越礼子=訳/賀偉=日本語版監修

A5判/352頁/並製/定価:4,200円(本体4,000円+税) 送料210円

中医学を学ぶための雑誌『中医臨床』(季刊)ますます面白く、実用的な内容になっています。

東洋学術出版社

ご注文は、メールまたはフリーダイヤルFAXで

FAX.0120-727-060

販売部:〒272-0823 千葉県市川市東菅野1-19-7-102 電話047-321-4428 / E-mail:hanbai@chuui.co.jp / ホームページ <http://www.chuui.co.jp>



「通」を基本に据えた
賀氏の3つの通法のすべて。

賀普仁=著/名越礼子=訳
賀偉=日本語版監修

A5判/352頁/並製
定価4,200円(本体4,000円+税) 送料210円

■目次と内容見本

序

本書を読むにあたって

第1章 緒論

第1節 賀氏針灸三通法の概略

賀氏針灸三通法の基本は「通」／賀氏針灸三通法の基本は微通・温通・強通の3法

第2節 針灸三通法の形成

賀氏針灸三通法の理論的な基礎は『内經』／賀氏針灸三通法は歴代の医家の思想の精髄を吸収／賀氏針灸三通法は個人の学術経験の融合

第2章 微通法

第1節 微通法の概念

第2節 針に熟練するための身体トレーニングと気の練功

第3節 微通法の施術

刺入／候気／行氣法／補瀉法／置針法／抜針法

第4節 正しい刺激量の決め方

臨床症状の分析／年齢による区別／職種による区別／性別による区別／肥瘦による刺激量の区別／季節および気候の影響／気候風土と習慣／部位による違い

第5節 刺激の効果と臨床実践

第6節 適応症と注意事項

第7節 典型的な症例の治験

脳血管障害／眩晕〔めまい〕／暈厥〔失神〕／脳振盪後遺症／小舞踏病／頭搖／癲癇／癲狂〔精神障害〕／癲病〔ヒステリー〕／微熱／慢性気管支炎／胸膜炎／震顫〔振顫〕／肩関節周囲炎／腰腿痛／顔面神経炎〔顔面神経麻痺〕／偏頭痛〔片頭痛〕／周期性麻痺／橈骨神経麻痺／心筋異常／嘔吐／呃逆〔しゃっくり〕／放射線障害／腸癰着〔腸管癰着症〕／水腫〔浮腫〕／慢性腎炎／淋病／癃閉〔排尿障

害・排尿困難〕／遺尿〔夜尿症〕／遺精／陽痿〔インボテンス〕／肛門瘙痒／口腔潰瘍／失音〔失声症〕／網膜炎／視神経萎縮／複視／眼瞼下垂／斜視／白内障／鼻炎／耳鳴り・耳聾〔難聴〕／甲状腺腫大／リンパ節炎／白瘢風〔白斑〕／湿疹／蕁麻疹／神経性皮膚炎／鶴掌風〔手部慢性湿疹〕／対側性進行性掌蹠紅斑角皮症／脱毛／脱肛／蛲虫病〔ぎょう虫症〕／子宮脱／不妊症／卵管留水症／子宮筋腫／溢乳〔乳汁漏出〕／小児麻痺〔ボリオ〕／驚厥〔小児のひきつけ〕／知恵遅れ／多動症／口吃〔どもり〕

第3章 温通法

第1節 火針療法の歴史

火針の品質／火針の加熱／火針の刺法／火針の刺入深度／火針の適応症／火針の効果

第2節 温通法のメカニズムと適応症

祛寒除湿／清熱解毒／消癥散結／祛腐排膿／生肌斂瘡／益腎壯陽／昇陽／举陷・温中和胃／宣肺定喘／通經止痛／祛風止痒／解痉止攣／除麻

第3節 温通法の針具

細い火針／中ぐらいの太さの火針／太い火針

第4節 温通法の施術

火針療法における操作上の必要事項

第5節 温通法の刺法

針具の太さの分類／刺針方法の分類／抜針の速さの分類

第6節 典型的疾患の治療例

発熱／流行性脳脊髄膜炎／高血圧症／三叉神経痛／麻痺〔痺れ・知覚麻痺〕／急性胃腸炎／疳積〔小児の慢性栄養不良〕／急性結膜炎／酒皶鼻／脱毛症／座瘡〔アカネ〕／黄褐斑〔肝斑〕／毛囊炎／湿疹／帯状疱疹／アレルギー性皮膚炎／汎発性神経性皮膚炎／牛皮癬〔乾癬・鱗屑癬〕／舌腫〔舌が腫れて痛む〕／丹毒／下肢静脈瘤

炎／多発性大動脈炎／閉塞性血栓血管炎／血栓性靜脈炎／下肢の慢性潰瘍／皮下腫瘍／腱鞘囊腫／卵巣囊腫／膀胱〔鼠径部の癰腫〕／乳がん／外陰白斑／バルトリーン腺膿瘍／神経性皮膚炎／凍瘡〔しもやけ〕／翼状片／鼻出血／鶴眼〔うおのめ〕

第4章 強通法

第1節 瀉血療法の歴史

解熱作用／止痛作用／解毒作用／瀉火作用／止痒作用／消腫作用／痺れを治す作用／嘔吐を抑える作用／止瀉作用／救急治療

第3節 強通法の針具と刺法

三棱針／毫針／梅花針／緩刺法／速刺法／挑刺法／閑刺法／密刺法

第4節 強通法の禁忌と注意事項

患者の禁忌／手法の禁忌／大・中動脈の刺針の禁忌／腧穴を正確に取る／消毒を徹底する／針具が鋭利である／持針の確実性

第5節 典型的な疾患の治療例

発熱／流行性脳脊髄膜炎／高血圧症／三叉神経痛／麻痺〔痺れ・知覚麻痺〕／急性胃腸炎／疳積〔小児の慢性栄養不良〕／急性結膜炎／酒皶鼻／脱毛症／座瘡〔アカネ〕／黄褐斑〔肝斑〕／毛囊炎／湿疹／帯状疱疹／アレルギー性皮膚炎／汎発性神経性皮膚炎／牛皮癬〔乾癬・鱗屑癬〕／舌腫〔舌が腫れて痛む〕／丹毒／下肢静脈瘤

【参考資料】賀氏針灸三通法による頸椎症治療 265 例の臨床報告
臨床データ／治療方法／治療結果／典型的な症例／考察

【付録】本書で用いられた腧穴の一覧表
あとがき
索引

第3章 温通法

火針療法における操作上の必要事項

1. 腧穴を定める

直接病巣局所に刺針する場合はもちろん、経穴あるいは圧痛点を探す場合も消毒して、刺針する前に選んだ腧穴に印をつける。通常は、拇指の爪で押して×印をつけ、刺針の正確性を期す。

2. 消毒

腧穴を決めたら、25%のヨードチンキをつけた綿花で、腧穴を中心に同心円を描くように消毒し、その後75%のアルコール綿で同様の方法で同心円を描きながらヨードチンキを拭き取る。アルコールが乾いてから施術をする。病巣が切れたり壊れたりしているものに直接刺針するときは、ヨードチンキやアルコールで被損部を直接消毒してはならず、生理食塩水を綿花に浸して拭き取るか、洗い流すのがよい。

3. 針体の加熱

消毒が終わったら、アルコールランプに点火し、左手を持って、刺針する腧穴あるいは部位に近づけ、右手で筆を握るよう針を持ち、針尖と針体を炎にあわせる（図3-3）。刺針に必要な深度に応じて、針体が赤くなる長さを決め、必ず赤くなるまで焼くようにする。針が赤くなければ効力も強くなり、疾病を完全に取り除くことができ、効果も速く現れる。また針が赤くなれば、刺入して切皮をするときに、入りやすく苦痛も少ない。針体が赤くなれば、刺入して切皮をするときに、入りやすく苦痛も少ない。針体が赤くなれば、刺入して切皮をするときに、入りやすく苦痛も少ない。針を焼くときに炎に入れる方法にもコツがある。けっして針体を炎の中心に入れてはならない。炎の中心は温度が低く、熱力が足りないので、赤くなるまで針体を焼くことができない。炎の周辺は燃焼力が十分にあり、温度が最も高く、速く焼けるので針が赤くなりやすくて、針を焼くのに最も適した



図3-3 針体を炎に入れ加熱する

4. 刺入

針を焼いて赤くなったら、針が赤いうちに迅速かつ正確に針を腧穴に刺入し、すばやく抜針する。この一連の過程はだいたい10分の1秒である。動作が緩慢で時間がかかるれば、針体の温度は下がり、針体が充分に加熱されていない状態となり、患者に苦痛を与え、また治療効果も低下する。そのため火針療法の技術のキーポイントは「速い」ことである。迅速に刺入しようと思うなら、操作技術を磨くだけでなく、ある程度の指力と腕力が必要になる。気力をうまく運用することができれば、刺入速度を更に高めることができる。

5. 火針の置針問題

火針療法は、速く刺すことが重要なので、ほとんどは置針しない。ただし患者によっては置針を必要とする。しかし置針時間は毫針の場合よりも短く1～5分程度である。火針で置針するときも、得氣と手の感覚に注

第4章 強通法



図4-5 ②血を押り出す

3. 挑刺法

この刺法は、胸部・腹部・背部・頭部・顔面部の腧穴や筋肉の薄い部位に適用する。「羊毛疔」〔季節の邪を感受して突然発する疔〕・「偷針眼」〔麦粒腫〕などの症状に用いる。刺針時に顔面部の変色した部位を正確にみきわめて、左手でその部位の皮膚をつまみ上げ、右手に「三棱針」を持って横から引っ掛けるように刺す。

4. 圈刺法

この刺法は、施術時に赤く腫れた患部の周囲を「三棱針」で數カ所あるいは数十カ所刺す。刺針後、両手指で局部を軽く押えて押り出すか、抜罐で吸い出す。悪血が出てくしたら、腫瘍はなくなる。この方法は、癰瘍・腫瘍および大頭瘍〔季節の邪毒が三陰経絡に侵入して起こる病症。顔面丹毒・流行性耳下腺炎などの類〕・丹毒などの症に適用する（図4-6）。

5. 密刺法

この方法は、皮膚病・頑癬〔難治性の湿疹・浅在性白斑など〕などに適用する。施術時は、梅花針で患部をたたき、局部から微量の血液を出す。治療効果は比較的よい。



図4-6 ①患部の周囲に圈刺法を行う②血を押り出す

第4章 ● 強通法の禁忌と注意事項

瀉血療法は、強硬な手法であり「強通法」に属し、実証・熟証に対して特異な治療効果がある。もちろんいかなる治療方法にも、ある病證に対して顕著な効果があつても、別の病證には禁忌であることがある。瀉血療法にも禁忌がある。